腐り切った組織の実態を継続してウォッチする　第七十七弾

神社本庁再生への道―その四十

虚飾にまみれた権力亡者たちの末路や如何

―神道人は自らの魂を奮いおこせ

藤原　登（フリーライター）

裏金問題がきっかけとなり、自民党の化けの皮がついに剥れ落ちはじめた。岸田総理は平静を装っているものの、全てが裏目の展開となってきている。これは裏金や統一教会問題に限らず、不祥事が起きても全て有耶無耶のまま逃げ続け、トカゲの尻尾切りで隠蔽を続けてきたことの当然の結果である。

神社本庁の田中執行部も、政府自民党と全く同じ状況にあり、知る限りの情報をもとに予測すると、遠からず自民党以上の修羅場を体験することになるだろう。

今月は、神社本庁で評議員会が開催される。評議員の総数は百六十名以上にのぼるが、職舎売却をめぐる疑惑が発覚してから八年が経過し、大半の評議員は、その後の展開も含めて、疑惑の性質や実態を既に理解していると思われる。もはや田中氏側が、態勢を挽回できる状況にはない。にもかからず筆者に届く知らせは、田中氏側の独断専横による被害情報ばかりである。

その理由は、ただ一つ。大勢は不利でも田中氏の支持者は、最高裁で審理が続いている総長選任をめぐる裁判において、遠からず芦原理事の上告を棄却する判断が下され、田中氏が晴れて正式な総長に就任するものと、心の底から信じているらしいのだ。しかし、昨年末には出る筈の最高裁の決定は未だに出ていないし、仮に最高裁が芦原理事の訴えを斥けても、應司統理が田中氏を総長に指名し直すことなどあり得ない。しかし、田中氏を支持する過半数の理事を頼みに、今も権力を行使して利権を貪っているということだ。

権力亡者達たちが取り仕切る執行部の実態が、完全に末期状況であっても、事態が改善しないのは、正常化を目指す側の陣営に、まだまだ何かが足りないからではないかと思う。評議員会に向けて、一層の精進と研鑽を期待したい。

戦後体制が生み出した利権構造

心地よい戦後体制に安住し、虚飾の繁栄を続けてきた権力亡者たちによって、父祖の魂が宿る日本の国土が浸食され続けてきた。その最たるものが原発と米軍基地であると筆者は考えているが、近年はさらに、リニア鉄道や大阪万博が新たに名乗りをあげてきた。国家百年の大計もないまま、目先の利益に目の眩んだ者たちによって進められているこれらのプロジェクトの行く末が無残な結末を迎えたとしたら、悲しい責任のなすり合いが起こるだろう。

成熟した民意によって、責任ある政治体制が日本に構築されるまでには、まだまだ時間がかかる。現在の日本は、完全に負のスパイラルへ落ち込んでしまっている。しかしこれは逆に言えば、これまでの根本的な誤りに国民全体が気づき、維新、変革への胎動を本物にしてゆくチャンスでもある。今、必要なものは、相手が誰であろうと、不羈独立の精神で向き合い、自立して行動する日本人の信念だ。魂を失った権力者に立ち向かうには、自らの魂を研ぎ澄ます以外に方法はないからだ。

権力の亡者に蝕まれた日本の縮図が、田中―打田体制のもとで腐敗の極みにある神社本庁である。しかし、この状況は、政治と国民の関係と同様に、上に立つ執行部のみの責任ではない。田中体制に安住して、不作為にしろ故意にしろ、不正を見逃し、社会との信頼関係をおざなりにしてきた神道界全体の責任でもあるからだ。

人類の文明社会は、社会の価値観を受け継ぐ子孫を残してゆくことで存続している。それを担うのが教育である。同様に組織も、組織を担う人材を、世代を超えて育ててゆく営みを繰り返すことで存続している。何代にもわたるその営みによって、その組織固有の文化も形作られ、伝えられる。しかし、神社本庁に限らず、日本の戦後体制の中で生まれ、存続してきた組織は、最初は設立の理念を高く掲げていても、いつの間にか継承への意義も、継承すべき原点も忘れ去られ、利権集団と化してゆく傾向がある。政治権力の利権化は、その性格からある意味、納得できるが、神社組織の利権化は、なかなか筆者の理解の及ぶところではなかった。

しかし現実に、清浄であるべき神社の組織でさえ、政治と歪んだ形で結びつくことで、利権化が進んでいった。それを加速したのが、打田文博会長率いる神道政治連盟であるが、神社本庁を裏で操ってきた打田氏の台頭と、裏金問題の起点となった森元総理の誕生とが符合していることは、本紙の三月号でも触れた通りである。

魂の言葉を発するとき

利権の中身は、いつの世も人と金に集約されるが、田中―打田体制が狙いを定めた利権が、有力神社の代表役員である宮司の人事権と、神社が有する莫大な不動産であることは間違いない。そして神道界の自浄作用が、ここまで機能不全になったのも、まさに国家の理念すら忘れ去った戦後体制にドップリ浸かってしまったが故であろう。

何れにしろ、権力とは麻薬である。民主主義は、権力の暴走を食い止める仕組みであるかもしれないが、それが万全ないことも、我々は歴史の中で幾度も経験してきた。いや、多数決による民主主義の暴走ほど、恐ろしいものは無いという実感を、筆者はずっと抱いてきた。社会的少数者の立場に立てば、尚更だろう。

今、数々の不祥事で腐敗しきった田中―打田体制は、自壊の寸前である。しかし、これまでの展開をみても、権力という魔物に取りつかれた面々が、簡単に引き下がるとは思えない。今、良識ある神道関係者が直面している試練は、こうした魔物と戦わなければならないことである。釈迦に説法という言葉は失言かもしれないが、それを覚悟の上で言うなら、自らの魂を磨き、魂からの言葉を発してゆく以外に、方法はないのではないか。魂の言葉が彼方此方から発せられるならば、懦夫をして起たしめ、言霊は猛き声となって悪霊を退散させてゆくと思う。これは神社を崇敬する国民の心からの願いでもあると、筆者は感じている。

藤原　登（ふじわら　のぼる）
昭和二八年、東京に生まれる。広告代理店勤務の傍ら、歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。